

第百五十五話 日本版「電撃戦」、成功の要件

第二次世界大戦初期、ドイツが、戦車部隊による突破が困難と考えられていたアルデンヌの森を一気に突破し、空軍と連携して仏領内に侵攻した「電撃戦」は夙に有名である。実は、日米英蘭戦開戦劈頭、日本陸海軍が敢行したマレー作戦も、日本版電撃戦と言っても過言ではないだろう。幾つか考えさせられることもある。

1 マレー作戦の概要

南方作戦は、開戦と同時に、マレー半島とシンガポールの攻略、香港攻略及びフィリピン攻略を敢行して重要軍事拠点覆滅し、爾後蘭印の重要資源地帯を確保しようとするものであった。

兵力：日本軍=35,000、英連邦=88,600

東洋のジブラルタルと称されるシンガポール占領を目標とするマレー作戦は、綿密な陸海軍調整、情報、兵站の準備を万端にして、海南島の三亚を出港した(海軍部隊指揮官：小沢治三郎中将)上陸部隊は、1941(S16)年12月8日の真珠湾攻撃とほぼ同時(実際はマレー作戦が早かった)に、タイ及びマレーのコタバル、シンゴラ・パタニ等に敵の抵抗を排除しつつ上陸した。山下大将率いる第25軍は、縦断道路1本で距離1100km、両側はジャングルとゴム林、大小250本の河川、ジットララインと呼ばれる防禦地帯を突破した。クワンタン攻略、エンドウ・メルシン攻略、クワラルンプール攻略そしてシヨホール・パル攻略を経て1月末にはシンガポールを臨むラインまで進出した。1月31日、軍命令により攻撃開始2月8日渡航開始し、予定の3か月よりも大幅に早い55日で、難攻不落の要塞シンガポールを奪取した。時に2月15日であった。この間、航行中であつた英国東洋艦隊の新鋭戦艦プリンス・オブ・ウエルズ、レパルス等を航空攻撃により撃沈した。

英守将パーシバル中将はシンガポール失陥は断水が原因であると云っている。日本軍も表面的な華々しさは兎も角、砲弾が底をついていたという状況だ。彼我共に苦しかった。「作戦日数55日、1日平均20キロを進撃、交戦回数95回、1日平均2回、橋梁修理250橋、1日平均5橋」と言われる。

2 成功の要因

①陸海軍の密接な調整：上陸作戦は統合作戦であり、周到な調整実施

②制空権の獲得

③兵要地誌等情報収集：在留邦人や現地人の協力をも得て作戦に必要な情報を収集

④チャーチルの過誤 マレー作戦を予測するも日本軍を過小評価、「大英帝国史上最大の悲劇」、シンガポールの背面に対する考慮少なし

⑤兵站面：戦車団の増強、自動車化歩兵師団の編成、銀輪部隊(第44話参照)の編成、南方軍鉄道隊の活躍、工兵隊による迅速渡河実施、捕獲車両(2,723台)の戦力化(免許所持者が多数居たという)(捕獲車両の修理・整備体制：23野戦自動車廠、移動修理班編成等)、残地燃料及び捕獲食糧(チャーチル給養)の活用、現地における食糧の現地調達も順調、トラックを舟艇に積載し海上機動で敵の背後を襲撃、シンガポール攻略に際し兵站態勢を再構築

*電撃戦成功の要因の一つは、兵站補給の万全であつた。

3 兵站軽視・無視と云われる日本軍であるが、マレー作戦では兵站が成功の大きな要因でもある。この様な日本軍がインパールや島嶼作戦では兵站で失敗している。成功の美酒に酔って原点を忘れたのか？既に国力を超えており無謀だったのか？質の伴わない兵站態勢だったのだろう。大作戦程後方面の態勢確立が成功の要諦だ。現在でも通用する金言であると思う。

